

生徒が教師の視点に立って地域学習の授業計画を考える授業によって得られる学びについての検討

— 高大連携で取り組む授業の一例として —

多賀 秀徳（三重県立飯南高等学校）

櫛木 義人（三重県立飯南高等学校）

中西 良文（三重大学）

1. 問題と目的

三重県立飯南高等学校（以下、飯南高校）は、平成 11 年度に連携型中高一貫教育校となり、同時に普通科から総合学科に改編した学校である。そこで、連携中学校の教科「人間と社会」と飯南高校の「産業社会と人間」との接続をはかるなど、中高 6 年間の学びを通して生徒一人ひとりの興味・関心を育て個性を伸ばす教育を行っている。また総合学科として、郷土・環境系列、介護福祉系列、総合進学系列（開設当初は国際コミュニケーション系列）、コンピュータ系列の 4 系列を設置し、2 年次より系列に分かれて学びを進めている。その各系列での専門科目とともに、総合学科の特性を活かしたバリエーション豊かな選択科目を設置し、中高一貫教育の趣旨を大学との接続にも活かすため、改編当初から高大連携の取り組みも進められてきている。

そこで総合進学系列では、系列の必修科目である学校設定科目「社会科学入門」（2 年次 2 単位）を、高大連携授業を実施する科目として位置づけて取り組んでいる。この科目では平成 12 年度から大学との連携を実施し、高校教員と大学教員によるティームティーチングの形で学びを深めている。授業目標は「専門分野の講義・演習を通して、学問に対するより高い興味・関心を育み、社会科学を中心とする学問の基礎的素養をやしなう」であり、現在は行政学、看護学、教育学、経済学の 4 つの専門分野から大学教員等を招請し、リレー方式による高大連携授業が進められている。

従来から社会科学入門の授業は大学教員によるリレー方式で進んでいたものの、受講する生徒は 1 科目で 4 つの別内容を学習するという感覚に陥ってしまい、結果的に単発的な出前形式の授業と捉えられている様相がみられた。そのような課題がある中、飯南高校は令和元年度から文部科学省事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」（以下、文科省事業）の採択を受け、地域を学び場とした探究活動を充実していくこととなった。これを機に社会科学入門の授業においても、多賀(2022)の実践にもあるように、各専門分野に「地域」という軸を置き、自分軸と繋げられる授業への転換を図るとともに、学びに共通した視点を持たせて授業展開をすることとなった（注 1）。

その専門分野の 1 つである教育学においては、平成 30 年度までは教育心理学の視点から人の記憶や学習動機づけに関する講義・演習を実施していた。受講生徒からは「覚える

ためのコツがわかった」、「今後の勉強に役立てたい」など好評の内容ではあったが、習得の学びに留まるものであった。そのため、令和元年度から文科省事業の採択を受けたのに伴い、教育学における知識を習得し、そして活用する学びへと深化させていく方向への改善を進めることとなった。

そして地域との協働した学びを模索する中で、近隣の小中学校に対して高校生が出向く場面が想定されたため、地域という軸を持ちながら実施できる授業内容を高校教員と大学教員で協議することとなった。その結果、高校生が教師としての立場で考える視点を取り入れ、教材づくりや授業課題を考えることが計画された。議論の末、教育学では授業テーマを「よい学習の4つのポイントを活かした地域学習の課題を考えよう」とし、作成型の授業展開とすることとなった。

本研究では、高大連携授業の社会科学入門において、教育学の視点と地域とを掛け合わせた授業実践を行うことにより、生徒がどのような地域学習の授業課題（授業計画）を考えることができるのかを明らかにし、高大連携授業のあり方について考えることを目的とする。また、学びを通して生徒にどのような変容がみられたのかを検討し、今後の授業内容を充実させる基礎資料とする。

2. 実践の概要と学習記録収集の方法

本研究で取り上げる授業実践は、社会科学入門の授業における教育学を専門分野とする箇所である。従来行われていた教育心理学の視点から人の記憶や学習動機づけに関する講義・演習から、授業テーマを「よい学習の4つのポイントを活かした地域学習の課題を考えよう」とし、作成型の授業展開として実施した。生徒は中学校1年生の教師になったと想定し、飯南（広くは松阪）地域の学習を行う授業課題を作成していくこととした。実施した計4回の授業内容は、以下の通りである。

第1回授業：よい学習の4つのポイントを学ぶ

第2回授業：地域学習の授業課題（以下、授業計画）を作成する

第3回授業：前回授業で作成した授業計画を他グループと共有し、再度計画を練る

第4回授業：前回授業の内容を踏まえ、授業計画を改善して完成する

以下に、この4回分の授業内容について、今年度（2023年度）に実施した授業に基づきそれぞれ具体的に示していく。

第1回授業

日時：2023年9月12日（火）8:40～10:30

受講生徒：12名

内容：よい学習の4つのポイント（以下、4つのポイント）を学ぶ

授業者：多賀、樫木、中西

この授業は大学教員のファシリテーションによって進めていき、高校教員はそのサポートを行った。今回が初回授業にあたるため、教師の大きな仕事として授業があること、その授業づくりを教師になったつもりでグループごとに創り上げていくことを伝えた。そして、中学校1年生向けに授業計画を作成することがこの授業の目的であると共有した。また、学習者の学びがより良くなるように、学習科学の研究で重要な要因として取り上げられている4つのポイント（注2）を取り入れて授業計画を作成するように伝えた。

説明後、4つのポイントを学ぶためにジグソー学習を用いることとした。今回は4人グループを編成し、それぞれホームグループで担当を分担して、まずは担当したポイントが記された資料を個人で読んで理解していった。そして同じ資料の担当者同士が集まり（エキスパートグループ）、そのエキスパートグループで資料を読み合わせて理解を深めた。その後、ホームグループに戻って担当した資料の内容を紹介し合い、グループで4つのポイントについて理解していった。

4つのポイントとして示した資料は、

- ①自力でやると学習効果UP — 自己積極性の効果
- ②「みんなで」やると学びが深まる — 協同の効果
- ③「現実の問題」で学ぶとレベルが上がる — 日常的課題の重要性
- ④モノを作ると効果有り — 「ツール」を使うことの効果

の通りであった。それぞれの資料では2つの内容を各1枚（計2枚）で取り上げ、生徒の理解を促すために文章とともに図解も活用して示した（以下では図解の紹介は割愛する）。

①においては、「発見学習」（注3）と「自己生成効果」（注4）を取り上げ、以下のような構成とした。

< 発見学習 >

- ・まず、「三角形の内角の和が 180° になる」ということを学習する場合、先生が説明で教えるだけの場合より、子どもにたくさんの三角形を渡し、その三角形をちぎって3つの頂点の角度を合わせるとどれも一直線になる（ 180° になる）という体験から法則を発見させる方が、学習の定着が望ましいという例を示した。
- ・その上で、自ら法則を発見する中で学んでいくやり方を「発見学習」といい、発見学習ではより学習の効果が高いと示されていることを説明した。

< 自己生成効果 >

- ・まず、2組の英単語の組み合わせを覚えさせ、どういう組み合わせがあったかを、後から思い出させる場合、「White-Black」のように対になる言葉を「そのまま」示す条件と、「White-B_a_k」のように対になる言葉の片方を空欄にして、「実験参加者自身が穴埋め」をして覚える場合では、参加者自身で穴埋めして覚えた方がよりたくさん単語を思い出せることを示した。

- ・その上で、自らが法則などを生み出して（自己生成して）学習する方が学習の効果が上がるといわれていることを説明した。

②においては、説明を求める効果と実行役とチェック役の役割分担の効果という見出しで、それぞれ「説明の要求による理解の深化」（注 5）と「課題遂行役とモニター役の役割分担」（注 6）に関する研究を紹介し、以下のような構成とした。

<説明を求める効果>

- ・まず、「遺伝子の働き」を発見する課題を一人で行う場合と、二人で協力して行う場合では、二人で協力した方がより成績が良く、それは二人の会話の中での問いかけとそれに対する説明によって生じていることを紹介した。
- ・その上で、このような「説明の要求」と呼ばれる働きかけとそれに応える説明活動によって理解が深まっていくことが、協同での効果をもたらす 1 つの要因であることを説明した。

<実行役とチェック役の役割分担の効果>

- ・まず、「折り紙の 4 分の 3 にした部分を、さらに 3 分の 2 にした部分にぬりつぶしをさせる」といった課題で、一人とペアでの協同の違いを検討した結果、ペアで行った方が、「計算して答えを導く」という、より優れた方法が用いられやすいことを紹介した。
- ・その上で、計算が行われるのは、折り紙課題を、一人が実行役（課題遂行役）になり、もう一人がチェック役（モニター役）になることによって生まれることを説明した。

③においては、日常的課題の重要性について、「学習の転移」（注 7）と「誤概念の修正」（注 8）を取り上げ、以下のような構成とした。

<学習の転移>

- ・まず、小数点のある割り算を学んだ子どもに、「40 人のりのバスに、100 人の子どもが乗るには何台のバスにどんな風に乗ると良いか」といった問題を解かせると、「2.5 台」という答えが出たり、「3 台」という答えではあるものの、最初の 2 台に 40 人ずつ乗せ、最後の 1 台には 20 人乗せるという回答が見られるという例を示した。
- ・その上で、学校で学んだ知識が日常でうまく活かされにくいことがあるが、「実際にバスに乗る」という「現実の問題」に関わりながら学ぶと、それが改善される様子が見られることを説明した。

<誤概念の修正>

- ・最初に、小学校低学年の子どもは、ふだんの生活から大きな数が書かれていると、その数は大きいものだと思えるため、分数の理解がうまく進まないことがあり（た

たとえば、「分母が大きい分数」の方が、「分母が小さい分数」より大きな数である（と考える）、そのとき、先生の説明だけでその考えが修正されないことがあるが、実際にたとえばケーキなどを何人かで分ける課題（＝現実の課題）をすると理解が進みやすくなることを紹介した。

- ・その上で、日常生活で身に付いたゆがんだ考え方（誤概念）が、現実の問題を取り上げると修正されやすいということがあると説明した。

④においては、モノ（＝ツール）を使うことの効果について、「思考の外化」（注 9）と「モデルづくりによる学習」（注 10）を取り上げ、以下のような構成とした。

<思考の外化>

- ・最初に、私たちがさまざまなことを考えるとき、「自分の考え」を目で見ることができないが、何かしらのモノを作ること（ここには、たとえば「軽い力で遠くまで走る車」などの実際の形あるものだけでなく、学んだことをまとめたポスターを作ったり、図にまとめたりすることも含まれる）で自分の考えを客観的にみることができることを説明した。
- ・そのようにモノを作ることによって自分の考えを外から見ることができ（思考の外化）、それによって自分の考えをより理解できるようになることを紹介した。

<モデルづくりによる学習>

- ・最初に、例えば人間の「ひじ」の関節がどのように動くかを木やバネで模型を作って表現をすると、「ひじ」を曲げるときにちぢむ筋肉と、伸ばすときにちぢむ筋肉があることで、自由に曲げ伸ばしできるのだということが分かりやすくなるというように、モノを作るとき、シンプルにまとめることが必要になり、大切なことがわかりやすくなることを紹介した。
- ・このようにモデルとなるようなモノを作ることによって、ものごとをシンプルに捉えることにつながり、その事柄で特に大切なことに気づきやすくなることを紹介した。

以上 4 つのポイントについてグループ全員で学んだ上で、授業計画としてどのような題材を取り上げるのか、そしてなぜその題材（課題）を取り上げるのか（中学生に学ばせたいことは何なのか）について、グループごとに意見を出し合っていた。授業計画の方向性が決定したグループから次ページのワークシート項目 1 および 2 を記載し、4 つのポイントを授業内でどのように取り入れていくのか、その授業はどのような形で展開していくのかについて、この授業中は個人で考えて記入していった。完成できなかった場合は宿題として、次週までに準備しておくように伝えた。

1 どのような題材を取り上げるか(飯南の〇〇)	
2 なぜその課題を取り上げるのか(中学生に学ばせたいこと)	
3 よい学習の4つのポイントはどんな風に取り入れられそうか	
・ ①自己積極性	・ ②協同
・ ③現実の問題	・ ④モノをつくる

4 最終的にできあがった地域学習課題できるだけ詳しく書く
(授業のスタートから、最後のまとめまで、どんな風に進めたいか)

第2回授業

日時：2023年9月19日(火) 8:40～10:30

受講生徒：12名

内容：授業計画を作成する

授業者：多賀、櫛木

この授業は高校教員のティームティーチングによって進めていった。まず、前回授業のホームグループに分かれ、どのような題材を取り上げるのか、なぜその題材(課題)を取り上げるのか(中学生に学ばせたいことは何なのか)をグループごとに確認したのち、個人で4つのポイントをどのように取り入れるか、授業をどのように展開していくかを深める時間をとった。その後、個人で考えたことをグループ内で共有し、そこから1つの授業計画へと練り上げて詳細を検討していった。検討してまとめた授業計画はグループごとにワークシートへまとめさせ、次回授業でスムーズに共有できるように完成したワークシートを一旦回収した(各生徒の手持ち資料とするため、次回授業までに人数分を印刷した)。

また、次回授業ではグループごとに作成した授業計画について、ジグソー学習を用いて他グループと共有することを伝えた。すなわち、グループ内の一部の生徒に授業計画の作成を任せるのではなく、グループの一人ひとりが授業計画を理解していないと適切に伝えることができないという意識を持たせた。最後に、今回の授業を受けた振り返りをGoogleフォームで回収した。

第3回授業

日時：2023年9月26日（火）8:40～10:30

受講生徒：12名

内容：前回授業で作成した授業計画を他グループと共有し、再度計画を練る

授業者：多賀、櫛木、中西

備考：当日は授業公開週間により、2名の校内教員が参観

この授業は大学教員のファシリテーションによって進めていき、高校教員はそのサポートを行っていった。まず、前回授業においてグループごとに完成させた授業計画のワークシートを各生徒の手持ち資料として配布し、他グループに分かれて意見共有をはかる前に、グループごとに内容の確認を行った。

そして意見共有のための3人グループをつくり、より議論が広がるように、授業者や授業参観者をグループごとに配置して4人グループを編成した。5分発表→5分質問を1サイクルとして、それぞれ授業計画を共有した。その際、授業計画を発表する者は教師としての立ち位置を意識し、聞き手は生徒として考えるように伝えた。また、意見はダメ出しをするのではなく、授業をより良くするためのアドバイスを送るという視点で行うことも伝えた。共有後はホームグループに戻り、もらった意見を共有してから、現段階の授業計画をより良くするためにどのように改善できるかを考えていった。

最後に次週の活動がより良いものになるために、大学教員から「より学びを高めるにはどういったことが考えられるか」、「より興味が持てるようにするにはどうしたらいいのか」、「曖昧だったり伝わりにくかったり感じるところはないか」という提起がなされた。さらに「授業で大切なことは『学習者の学び』を第一に考える」ということを語り、大学教員がファシリテーションを行う授業の終わりとした。

第4回授業

日時：2023年10月3日（火）8:40～10:30

受講生徒：12名

内容：前回授業の内容を踏まえ、授業計画を改善して完成する

授業者：多賀、櫛木

前回授業で他グループからもらった意見や考えた改善点等について再度グループ内で検討し、あらためてより良い授業計画を完成させていった。その際、学習者の学びが第一になっているか今一度確認するように伝えた。また可能であれば、予想される生徒の動きや予想回答、時間配分なども検討させた。

そしてこのグループ課題とは別に、各生徒にレポート課題も提示した。ここでは、今回のグループ課題をとおして学んだことや自分がグループ内で果たした役割を記述させた。

3. 結果と考察

(1) 生徒が考えた授業計画について

2019 年度より 5 年間実践して得られた、授業計画の題材と取り上げる理由（カッコ内に示す）は次の通りである。

<2019 年度> 6 グループ 24 名

- ・飯南のお仕事（飯南でも働けるんだぞ）
- ・飯南のお茶で活性化！（若者のお茶離れ、飯南地域の活性化）
- ・飯南の花粉症（杉の木が多いから、杉の木と花粉症の比率）
- ・飯南のまつり（人との関わり、地域について）
- ・飯南の何もない現状（飯南には若い人にとって魅力的なものが少ない）
- ・飯南の林業について（林業の役割を知ってもらう、モノをつくることの重要性）

<2020 年度> 4 グループ 16 名

- ・地方移住（空き家・空き地の利用の仕方、移住者を増やす方法）
- ・過疎化（人口減少や空き家、高齢化）
- ・飯南・飯高の魅力と課題（自分ごととして捉えて学ぶ）
- ・飯南の深野和紙（飯南の特産品の素晴らしさとその現状、興味を持ってほしい）

<2021 年度> 4 グループ 17 名

- ・地域の良い所を見つけよう！！（住んでいるだけでは良い所はわからない）
- ・過疎問題（若い人たちが減ってきているから身近なものとして考えてほしい）
- ・自然（たくさん自然があり魅力を伝えられると思った、興味を持ってもらいたい）
- ・飯南のコロナ禍の地域創生（税金の使い道を知ってもらいたい）

<2022 年度> 3 グループ 12 名

- ・飯南地域の良さ（住んでいる地域について何があるのか知りたい）
- ・人口問題（人口減少になっている理由を考える）
- ・松阪の文化（松阪市の特産品をどのように有名にしていけるか）

<2023 年度> 3 グループ 12 名

- ・少子高齢化（今と過去とを比べて、未来で起こりうることを考える）
- ・過疎（過疎で起こる影響を学んで、地域を盛り上げてほしい）
- ・飯南は発展してほしい or そのままが良い？（自然破壊の恐ろしさを学ぶ）

以上を概観すると、地方移住や過疎といったキーワードから人口問題に関心が高いことや、お茶や和紙、自然といった飯南地域の特色をもとに構成しようとする意図がみられる。そして題材を取り上げる理由からは、地域の現状を知ってほしいという意味合いが強い傾向にあるが、近年は創造して考えていく内容がみられることも読み取れる。

4 つのポイントをどのように授業に取り入れていくかについては、2019 年度から 2023 年度までの 5 年間全 20 グループ分のワークシート項目「3 よい学習の 4 つのポイントはど

[illegible][illegible]

A word cloud visualization of survey responses regarding the "Local" (地域) concept. The words are arranged in various sizes and colors around the central term "地域". Other prominent words include "飯南" (Iinami), "多い" (Many), "知る" (Know), "取る" (Take), "行ける" (Can go), "振る" (Shake), "考える" (Think), "必要" (Necessary), "自然" (Natural), "思う" (Think/Feel), "過疎" (Overseas), "もらう" (Receive), "すぎる" (Too much), "現場" (Site), "現状" (Current situation), "減少" (Decrease), "全国" (Nationwide), "若者" (Youth), "感じる" (Feel), "ほしい" (Want), "特産品" (Specialty product), "高価" (Expensive), "聞く" (Listen), "年収" (Annual income), "土地" (Land), "立場" (Position), "人数" (Number of people), "利用できる" (Can be used), "強い花" (Strong flower), "少ない" (Few), "行事" (Event), "建物" (Building), "空き地" (Vacant land), "定住" (Residential), "比べる" (Compare), "消費者" (Consumer), "調べる" (Check), "片付け" (Clean up), "努力" (Effort).

A word cloud featuring numerous Japanese words associated with design and presentation. The most prominent words are "パワーポイント" (PowerPoint) at the top center and "作るまとめる" (making and summarizing) below it. Other visible words include "発表" (presentation), "グループ" (group), "使う" (use), "スライド" (slide), "グラフ" (graph), "地図" (map), "マップ" (map), "魅力" (charm), "振り返る" (reflect), "小ホワイトボード" (whiteboard), "おモチャ" (omocha), "書く" (write), "見える化" (visualization), "立休" (rest area), "書き出す" (start writing), "空き家" (empty house), "SNS" (social network service), "ポスター" (poster), "イメーシ図" (image diagram), "hp" (homepage), "年取" (aging), "調性大関" (tuning major key), "分かりやすい" (easy to understand), "考える" (think), "工程" (process), "アウトノット" (outnote), "木材" (wood material), "明細化" (detailed breakdown), "発信" (broadcasting), "地域" (region), "飯南" (Iinami), "人口問題" (population problem), "モデル" (model), "まちど" (city love), "確かめる" (confirm), "特産品" (local product), "行く" (go), "杉" (cedar), "切り倒す" (cut down), "オモチャ" (toy).

- 82 -

た地域学習課題できるだけ詳しく書く」の部分に以下のような形で記入していった。

4 最終的にできあがった地域学習課題できるだけ詳しく書く
(授業のスタートから、最後のまとめまで、どんな風に進めたいか)
「めあて」
1. 軽い自己紹介と挨拶
2. 生徒に飯南(松阪)の歴史について質問する
3. 有名な特産品(松阪牛など)の話題に繋げる
4. 昔の日本人の暮らしに欠かすことが出来たものとは?と生徒に質問
5. 深野和紙の特徴や歴史について説明
6. グループに分かれて和紙と洋紙の違いについて考える。*実際に和紙と洋紙を各グループに回す
7. 発表後、解説を加え、洋紙と和紙の需要が大幅に減少している現状を伝える
*画用紙にまとまり、動画を流す
8. 生徒達に自分の身の回りにどこまで和紙が使われているものがあるのか考えてもらう
9. 様々な例を出して、自分ならどんな商品であれば購入したいと思うかを考えて発表
10. 今回の授業で学んだこと、感じたことを振り返り、「めあて」への答えを書く

深野和紙を題材とした授業計画

4 最終的にできあがった地域学習課題できるだけ詳しく書く
(授業のスタートから、最後のまとめまで、どんな風に進めたいか)
★3分導入
○あいさつ(自己紹介)
○授業の流れをおおまかに説明(何をしていくか)
★①20分
○地域の特産品は何かとその特産品の良さを考える(1人) 3分
中学生が出してそうな特産品
・お茶
・松阪牛
・松阪木綿
・深野和紙
・おひたし
・こんにゃく
・そのほかいろいろ
高校生がどのように書けばいいか例を出す
↓どの特産品について学んでみようかグループ分けをする
○地域の特産品の良さを話し合う(グループ) 3分
→グループ分けした時の特産品
○特産品について授業(高校生)(おおまかな歴史や特徴、作り方など) 7分
→言葉だけでなく写真でも説明
○特産品の知名度を知ってもらう
・いくつかの特産品について調べて説明できるようにしておく
*写真も用意しておく(自分たちで現地へ行って撮らせてもらう)
→作っている人から話を聞いて授業で使う情報を集める
・1グループにつき高校生1人
○知名度を上げる方法を話し合う(グループ+担当の高校生) 5分
★②30分
○パワーポイント作成(知名度を上げる方法) サポートで高校生も作成
○パワーポイントの枚数や項目は高校生が用意
★3分
感想を発表(一人ひとり)(クラス全員)
・高校生が先に発表
・中学生の感想に高校生が質問する

松阪の文化を題材とした授業計画

例えば深野和紙を題材とした授業計画では、身近な話題から質問をしていき題材へと繋げ、教員(高校生)からの説明や生徒(中学生)が考える時間を取りながら進行していくものであった。「自分ならどんな商品であれば購入したいと思うか」という発展的な発問も入れるなど、生徒の興味・関心を引き出すために工夫を凝らしていることが見受けられた(このグループの授業計画は2時間配分として、今回の授業で考えた商品を2時間目に作る活動も入れていた)。

そして松阪の文化を題材とした授業計画では、地域の特産品の良さについて個人→グループで考える時間を取り入れていた。さらに、生徒の予想回答を示しながら時間配分も計画し、こちら「知名度を上げる方法を話し合う」といった発展的な活動を組み込んでいた。そしてグループごとに考えていく場には、担当の高校生がサポートとしてつくという工夫もみられた。このようにグループプロジェクトのような内容のものもあった。

さらに2つの授業計画を比較してみると、授業開始時に本時のめあてを説明する時間が確保されていた。地域学習を考えるだけでなく、学習者の学びを第一とした教育的な視点がうかがえる。授業最後に振り返りや感想を伝え合う時間が入っていることも、その表れであると考えられる。

また授業時間については、1時間配分のものや1日ないし2日かけるものと様々な計

画があった。松阪の文化を題材とした例を考えると、「作っている人から話を聞いて授業で使う情報を集める」といった校外での活動が想定されているため、予定では授業時間を1時間配分としているものの、現実的には数日かかる授業計画もみられた。飯南高校では令和元年度から文科省事業を受けて、近年ではフィールドワークを導入していることから1日ないし2日の授業計画が多くなっていると推察される。

（2）第2回授業後の生徒振り返りの内容について

第2回授業後、Google フォームでこれまでの授業の振り返りを実施した。受講生徒12名に対し、9名の回答を得た。以降の文中のカッコ（「 」）内には、Google フォームでの回答の原文を示すこととする。

【質問1】「よい学習の4つのポイント」を学んで、考えたことや感じたことを記述してください。

4つのポイントで最も多く記述がみられたのは、自己積極性の部分である。「先生が話したことをただ聞いたりノートにまとめるだけではなく、自分で法則を見つけたり意見を交換し合ったり、主体的にすることで良い学習になる」や「自ら発見したり考えたりすることが必要なのだと思いました」と、学習に対する姿勢を感じるものがみられた。そして、協同の部分と関連して「調べて共有することが大切」と、単に調べるだけではなく、周囲と意見共有することに関する記述も見受けられた。また、共有という部分と関連して、「自分の思考を外化（アウトプット）していくのも必要だし、大切だと感じました」とモノをつくる意味を改めて考える生徒もあった。これらのように、「授業でポイントを使えばただ覚えるだけでなく、その子の力になると思う。理解力を上げるために使えば役立つと思った」と、4つのポイントの重要性を理解する生徒が多くみられた。

一方で、「自力で法則性をみつけて取り組むのは難しそう」という声があった。「学習力はupするだろう」と理解はしつつも、その導き方を工夫する必要があると考えていることが推測される。そして現実の問題を取り上げる際に、「少子高齢化のことを考えましたが、どうしたら生徒が興味を持ってくれるのか考えるのが難しかった」と、授業計画の作成が生徒にとって困難な作業であった記述もみられた。ただ、「現実のことに置き換えるとめっちゃわかりやすかった」という率直な意見もあり、「確かにフィールドワークとか理科の実験とかよく覚えてるな」と、実社会での体験活動を踏まえることが学びにとって有意義であることを再確認できる機会ともなっていたようである。

【質問2】これまで受けた授業で、「よい学習の4つのポイント」を使っている（使っていそうな）授業はありますか。

現実の問題に関連して、1年次必修修科目である「産業社会と人間」の授業を挙げる生

徒が多数みられた。この授業では、学校周辺の地域を知り、他地域や自分自身と重ね合わせながら自己の在り方生き方を考え、地域を学び場にした学習活動が展開できるようにフィールドワークを実施している（注12）。そのため、事前に「自ら探して調べ」ていき、フィールドワークの活動をする「班で作戦をねった」機会があり、「実際にフィールドワークへ行った」「発表をした」といった、4つのポイントをすべて取り入れた授業だと考える記述がみられた。また、本授業の行政学分野で扱った人口減少問題や、数学の確率の問題で現実との関連性を考えるもの、担当教員の歴史総合の授業における個人活動やグループ共有といった授業展開を記述する生徒もみられた。

【質問3】ジグソー学習をやってみて、考えたことや感じたことを記述してください。

まず、生徒全員がジグソー学習を行うのは初めてであった。そのことで戸惑う活動になったかと思われたが、「自分とは違う意見や違う視点からみられてとても参考になった」や「自分だけでなく相手の意見を取り入れる大切さに気づきました」という意見があり、この活動に肯定的な意見がみられた。そして、「専門に分かれて話し合うことで、より深くその専門分野について考えられる」や「自分ですべてを理解しようとすると難しいので、他の人に説明してもらうことで理解しやすい」という意見から、担当した資料ごとのグループで資料を読み合わせて理解を深めていくことが効果的だったと考えられる。

また、「自分が理解したことを他の人に説明することで、更に理解を深める事ができる」や「自分で説明をすることでしっかり話すことが出来るし、より理解が深まると思った」という記述がみられた。このことは、ホームグループで資料を分担して活動することがグループに対する責任感を持たせるだけでなく、自身の理解を深めることにも繋がることを示していると考えられる。この学習活動を通して、「みんなで意見することで、より理解が深まることが実感できた」と生徒たちは感じる事ができたようであった。

【質問4】9月19日グループワーク前に、まず自分で授業計画について考えました。

そこで考えたことや感じたことを記述してください。

授業計画をつくるのが初めてかつ中学生向けということもあり、「1年生の集中力も考えながら作るのが大変だった」という意見があった。ただその中でも、「授業は内容によっては面白くないと感じる人が多いので、どうしたら生徒が興味を持つような授業ができるのか、良い学習の4つのポイントを見ながら考えました」と、学習者の視点をもって考える意見もあった。その際、「考えた結果、1年生のときにしたフィールドワークが良い学習の4つのポイントに当てはまる」、「教えてもらったポイントを活かすには、型にはまるけどフィールドワークがいいと思った」と、自ら経験した授業内容が授業計画を考える上で土台となっていることを示すような記述がみられた。

また、「1限でどのくらいまで進められるのかを考えるのが難しかったので、普段授業

をしてくれている先生たちはすごい」と日頃の受講する授業へと考えが及ぶ記述もみられた。その中で、「授業を受ける生徒の気持ちになって考えないといけないから大変だった。これをやってる（かはわからないけど）先生に失礼のないようにこれから授業を受けていきたい」と、自らの学びに向かう姿勢を考え直す機会になっていた。

【質問 5】9 月 19 日グループワークで、グループで一つの授業計画を作成しました。
その話し合いの中で考えたことや感じたことを記述してください。

9 月 19 日の第 2 回授業では、まず自分で授業計画について考え、その素案を持った上でグループ内での共有を行った。その結果、「班の仲間の意見を取り入れながら活動したため、自分では気づけない部分を発見することが出来た」や「似ている内容もありましたが、自分が考えていなかった内容もあったので、いい共有ができた」と、グループ共有によって授業計画を深められるという記述がみられた。しかし一方で、「4 つのポイントに当てはめるのは、班単位だと意外と難しい」という意見もあり、「実際に生徒に対して授業をすると考えると難しかった」という率直な感想もみられた。

授業内容については、「フィールドワークがとても凄かったのだと感じました」と 1 年次で受講した授業での経験を語る内容があり、結果それがフィールドワークを実施するという授業計画になっていた。近年の授業計画でフィールドワークをベースとするものが多いのは、このことから読み取ることができる。また、「生徒が受けていてきつく感じないか考えた」や「中学生にはハードな内容だと思ったけど、手順をスムーズに行っていけば授業は上手くいくのかとも考えた」と、意見共有後も学習者の視点に立った授業計画をしようと考えをもち続けている様子もみられた。

（3）意見共有後に得られた変化

第 3 回授業で他グループと意見を共有した後にホームグループで作成した授業計画には、いくつかの変化がみられた。次に、今年度（2023 年度）の少子高齢化を取り上げたグループの変化についてみていきたい。

このグループでは、2 日間を想定した授業計画を示していた。第 2 回授業段階（次ページ左のワークシート参照）では、まず少子高齢化について学び、その後校外に出て地域の方に話を聞く形を想定していた。その聞いた内容を班内で共有し、新聞作成後に別日程で発表の時間やジグソー学習での意見交流をはかって内容を深めることを意図していた。

第 3 回授業での意見共有では、このグループの授業計画に対して様々な意見が出ていた。例えば、地域の方へどのような内容を聞いてくるのか、またどのような回答が予想されるのかと、事前に授業者がどれくらい生徒の活動を想定しているのかという意見が出た。また、新聞をつくるのはいいが、どのような内容・意図を考えているのかといった、活動の意味付けに対する回答を求めるものもあった。

4 最終的にできあがった地域学習課題できるだけ詳しく書く
(授業のスタートから、最後のまとめまで、どんな風に進めたいか)

少子高齢化について学ぶ授業 (1,2限)

1限 少子高齢化とは 2限 班活動の流れ確認

外に出て行って地域の方にお話を聞く (3,4限) ①、③

地域の方に聞いた話などを班のメンバーで交流する (5限) ②

班交流の様子を活かしながらミニ新聞を作成 (6限) ④

別日 作成したミニ新聞を発表 ジグソーで交流する (3回程度)

宿題には 1,2限分作成の時間をとる。

4 最終的にできあがった地域学習課題できるだけ詳しく書く
(授業のスタートから、最後のまとめまで、どんな風に進めたいか)

1日目

1限目 少子高齢化について
教科書に載っている内容や今までに習った「少子高齢化」についての知識を学習したり、共有する。

2限目 班活動の流れ確認
各班に先生が1人付くように分かれる (4~6人程度の班)
質問の確認
地域の方が子供の頃と今の子どもは様子が違いがあるのか
少子高齢化が進むのはどうしたと思うか。また、変化したことはあったのか など
仮説を立てる
昔は外で遊ぶ子供が沢山いた
おき家がなくなった など

3,4限目 内容を記録しておく

5限目 情報整理
聞いた話の内容を班で確認
今までの活動までの少子高齢化について思ったことや分かったこと、考えたことなどを班で交流

6限目 ミニ新聞作成

各班でまとめた内容を参考に個人の意見をミニ新聞に表して発表するために与える
絵や写真を使ったり、地域の方のお話の内容を紹介したりして完成

宿題 次の1,2限で完成できる程度作成をしておく

2日目

1,2限目 ミニ新聞作成(続き)

2,3限目 発表・交流

ジグソーのように班を混ぜて分かれて少人数に向けた班内発表をする (3回程度班を混ぜて新しい発見をさせる)
授業が残り10分程になったら個人で振り返りの時間をとる

終わり

第2回授業段階の授業計画

第4回授業後の授業計画

これらを踏まえ、第4回授業後の授業計画（上記右のワークシート参照）では、次のような改善が入ったと考えられる。まず生徒（中学生）が地域の方へ聞く質問について、「少子高齢化が進むのはどうしてだと思えるか。また、変化したことはあったのか」といった、具体的な内容が含まれるようになった。さらに、質問に対する生徒の仮説（予想回答）も考え、生徒が校外に聞きに行く流れを補強していた。そしてこの質問内容や仮説を考える上で、1限目の少子高齢化を学ぶ時間では、教科書での知識や既有知識の確認を行い、事前理解の共有化も図られていることがみられた。

新聞については、「絵や写真を使ったり、地域の方のお話の内容を紹介したりしても良い」として、活動を進めることが難しい生徒を導くイメージが示された。そしてこの新聞を作成する前段階として、5限目に「少子高齢化について思ったことや分かったこと、考えたことなどを班で交流」する時間をとっていた。このことは、今回授業計画を作成する上でジグソー学習を取り入れたように、活動で得られたことを共有して理解を深めていく工夫であると考えられる。

これらの改善は、第3回授業最後に大学教員から「より学びを高めるにはどういったことが考えられるか」という提起がなされた部分を考えた上での変化であろう。そして、新聞発表の際に「新しい発見をさせる」という文言が入り、「個人で振り返りの時間をとる」といったような変化が現れたのは、学習者の学びを考え、学習者個人の変容も想定しながら

らの授業計画であったと考えられる。

（４）第４回授業後の生徒レポート内容

第４回授業後、グループでの授業計画の他に、所定の用紙に次のレポート課題を実施した。受講生徒 12 名に対し、12 名の回答を得た。以降の文中のカッコ（「 」）内には、回答の原文を示すこととする。

【レポート課題】今回のグループ課題をとおして学んだことや、自分がグループ内で果たした役割について記述しなさい。

この課題への回答によって、自ら受けてきた授業を振り返りながら、日頃の授業に思いを寄せる記述が目立った。授業計画に「スライドとレポートを作る」ことを取り入れたグループの生徒は、「普段（授業を）行っているときに、対話力や文章力がアップしていく感覚が全員あるという考えになった」ため取り入れたと記述していた。また同様に、「授業というのは私達がどうしたら理解力を高めるのか、しっかりと考えて計画を立てているということがわかりました」という記述をする生徒もあり、教師が生徒に対して「何について学ばせたいのか、そのことを学ばせてどんなことに繋がるのか考え」て日頃の授業が計画されているのかまで考える意見があった。「先生はどうやって生徒に教えようと試行錯誤している（原文ママ）」といった、教師としての姿勢も実感できたようだった。

そしてその考えの中で、学習者の学びを第一に考える様子も伺うことができた。今回は中学校 1 年生対象ということで、「難しくなく、楽しく、分かりやすい授業を作ることに気を付けました」や「興味を持てるような授業を考えることに心を置きながら、この授業に取り組んでいた」と記述があり、第 3 回授業での大学教員の提起に紐付けて授業を考えていたことが分かる。その中で、フィールドワークなど「今までに自分たちが受けた授業内容を参考にするのは良い案」として、授業を構成していったことも読み取れる。

ただ一方で、そのフィールドワークについて否定的な意見も出た。「今回の反省点は、現実の問題としてフィールドワークを取り入れたことです。対話力や追究力がある程度ついている私たちは簡単に感じますが、この授業計画では『中学生』が取り組む設定なので、知らない人に突然話を聞くことは難しいのではないかとし、結果的に授業計画にはフィールドワークを取り入れたものの、調べたことを共有して他地域との比較をするなどの方法も良いのではないかとした。高校での学習経験をとおして身につけた力を実感しつつ、学習者の視点に立った検討をしたものと考えられる。

また、今回のグループ課題をとおしてグループ内で果たした役割として、意見を出す役割を行ったとする回答が多数みられた。「他のグループからもらった意見をしっかりと同じグループに伝えた」ことでグループ内での活動が活発になり、「気づいたことと共に、協同の大切さをグループの仲間たちに伝え」ることで、「みんなでやると学びが深まる」

ことを実感しながら協同の効果を考えて活動していたと推察される。

この授業を踏まえて、学習への考えを深める生徒の意見もあった。少子高齢化について考えた生徒は、「小学生や中学生などの夢がたくさんある年齢の1人でも少子高齢化についてや地域の事についてなど、学んだり知りたいと思ってもらえることができれば、地域学習をするという目的が学習しましたで終わらないと思います。学習をしてそこからなにが得られるのかが大事だと私は思います」と記述している。今回計画した授業が受講して終わりではなく、そこから生徒が何を学び取ったのかが重要だと考えていると推察される。

4. 総括的考察

まず本研究では、教育学の視点と地域とを掛け合わせた授業実践を行うことにより、生徒がどのような地域学習の授業計画を考えることができるのかを検討した。授業計画の題材と取り上げた理由から、人口問題や飯南地域の特色をもとに地域学習を構成しようとする意図がみられた。そして授業計画の詳細から、単に地域の現状を知るといった内容だけでなく、今後どのようにしていくと良いかといった創造的な学びも検討できることが示唆された。

そして、よい学習の4つのポイントを取り入れるという教育学の視点を組み込むことで、自己積極性→魅力や課題の発見、協同→グループ共有やグループプロジェクト、現実的課題→飯南地域の特徴を活かす、ツールの利用→成果物の作成という形で、地域学習をより豊かなものにするために工夫を凝らした授業計画を作成することに繋がった。このことから、この高大連携授業に教育学の視点を取り入れることで知識を習得し、それを活用する学びへと深化することができる可能性が示されたと言えよう。

授業の構成としてはフィールドワークを導入する傾向がみられたが、生徒の振り返りやレポート課題から、1年次に経験した「産業社会と人間」で体験したフィールドワークを連想するものであったことが読み取れた。すなわち、地域学習を考える際には自ら経験してきた学びを体験する過程がみられ、自身が受講した授業を想起しながら4つのポイントを取り入れつつ授業計画が作成されることが示唆された。

またこの授業では、第2回授業から第4回授業にかけてジグソー学習を実施して意見共有をはかった。このことで他グループから新たな視点が入り、一旦完成した授業計画に対して意見共有を織り込むことで、授業計画により深まりが出る様子が示された。そして、今回初めて体験したジグソー学習の有意味さを見出して早速授業計画に導入を試み、共有の中で新たな発見を得させようと学習者の学びを第一に考えて授業計画を構成していくなど、4つのポイントである協同の効果を実感しながらグループ内で積極的に共有する姿がみられた。さらに、4つのポイントを学んだことによって自身の学習姿勢を見つめ直し、授業でどのような力が身に付くのかという部分にまで思考が及ぶ生徒もみられた。「学習をしてそこからなにが得られるのかが大事」という生徒の指摘は、学習者の学びを第一に

考えられたものである。

以上のように、よい学習の4つのポイントを取り入れるという教育学の視点を組み込んで地域学習の授業計画を考えることによって、地域の問題や特色をもとに地域学習を構成すること、工夫を凝らした授業計画作成で活用する学びへと深化することができる可能性があること、自ら経験してきた学びを追体験する過程がみられたこと、教師－授業者側の視点に立って考えるようになったことで自身（学習者）の学習姿勢を見つめ直す結果にも繋がることを見出されたと言える。

5. 今後の課題

これまでの実践では4つのポイントを習得し、活用の段階として授業計画を作成することはできているものの、それにもとづいた授業を実際実施することはできていない。授業計画を実施することによって、計画通りにできるのかあるいは改善の余地があるのかなど、生徒の姿を見とりながらより現実に即した授業として深めることができるだろう。このことは、地域学習における学びの本質に迫ることにも繋がり、探究を深められる学びともなるだろう。

そしてより地域学習の内容を高めていくためには、学校および地域の図書館等にある資料を活用する視点も必要になってくる。資料の活用は教材づくりにおいてより深みを与えてくれると期待され、文献や写真集等から収集した情報とフィールドワーク等で得られた情報とを重ね合わせることによって、より有意義な学習となっていくだろう。

また今回の授業実践では、生徒自身が体験した授業以外の構成がみられなかった。自ら経験してきた学びを追体験できるものとなっていたが、一方でそれ以上の発展性にまでは繋がっていない可能性がある。第3回授業を参観した校内教員の振り返りでは「自分もそうですが、今までの経験のなかからしか発想が出ない」という意見があり、教員側としても自身の授業デザインにおいて肝に銘じておかねばならない課題でもある。このことを克服するためには、今回のジグソー学習のように新たな学びの形を体験したり、様々な授業方法を紹介したりと、教育学の視点から有効な授業デザインを示していくことも必要だろう。

最後に、この授業計画に対して大学教員からのフィードバックを受け、生徒へ返す時間を従来設定してこなかった。専門的な知見からのフィードバックによって、授業計画や地域学習のあり方について磨きをかける時間も設定していきたい。このことは高大連携授業をより深みのあるものとし、さらには教師を目指す若手の育成にも繋がる可能性もあるのではないかと期待される場所である。

注1 多賀秀徳：社会科学入門における高大連携授業の展開 ―地域を軸とした学びを通して―，ユマニテク教育研究所紀要，1，p.92-108，2022.

注 2 Krajcik, J.S. & Blumenfeld, P.: Project-based learning. In Sawyer, R. K. (Ed.), the Cambridge handbook of the learning sciences. 317-333 New York: Cambridge. 2006 (R.K. ソーヤー編, 森敏昭・秋田喜代美監訳: 学習科学ハンドブック, 250-265, 培風館, 2009) .

注 3 Bruner, J. S.: The process of Education. Harvard University Press. 1960 (J.S. ブルーナー著, 鈴木祥蔵・佐藤三郎訳: 教育の過程, 岩波書店, 1963) .

注 4 Slamecka, N. J., & Graf, P.: The generation effect: Delineation of a phenomenon. Journal of experimental Psychology: Human learning and Memory, 4, 592, 1978.

注 5 Shirouzu, H., Miyake, N., & Masukawa, H.: Cognitively active externalization for situated reflection. Cognitive science, 26, 469-501, 2002.

注 6 Okada, T., & Simon, H. A.: Collaborative discovery in a scientific domain. Cognitive science, 21, 109-146, 1997.

注 7 National Research Council.: How people learn: Brain, mind, experience, and school: Expanded edition. National Academies Press. 2000. (米国学術研究推進会議編著, 森敏昭・秋田喜代美監訳: 授業を変える: 認知心理学のさらなる挑戦, 北大路書房, 2002) .

注 8 注 7 と同じ.

注 9 注 5 と同じ.

注 10 注 7 と同じ.

注 11 テキストマイニングによる分析は, 「ユーザーローカル AI テキストマイニングによる分析」(<https://textmining.userlocal.jp/>) を活用した. 出現頻度順で分析を行うと, 出現頻度が多い単語ほど大きく表示される. また, 単語は品詞の種類によって色が異なるようになっている. なお, 文中の誤字や脱字等は分析に支障をきたすため, 文意が分かるよう適切に修正した.

注 12 飯南高校の「産業社会と人間」における取組については, 紙面の都合もあるため別稿にて論考したい.